

絵本づくりにおける幼児の取り組み方

—母親へのアンケートからの考察—

安藤 則夫^[1] 植草学園大学発達教育学部
 植草 一世^[2] 植草学園大学発達教育学部
 馬場 彩果^[3] 植草学園大学発達教育学部

養育者が幼児の絵本づくりにどのように関れば、幼児の成長に役立つのかを考察することが本論の目的である。幼児の絵本づくりは、数ページにわたる内容の構成をしなければならないという困難さがある一方で、自分の絵本を作るという大きな魅力がある。また、自分の好きなテーマを選び、一生懸命打ち込むため絵本の中に幼児の人間性が現れてくる。今回、年長幼児に家庭で絵本を作ってもらい、どのような取り組み方が見られるかを母親へのアンケートによって確かめた。幼児の作った絵本を、図鑑的内容と空想した物語を描いた内容、思い出アルバム風の内容という3つの内容に分類した。図鑑系の絵本では、好きな対象を探求する活動となる。物語系の絵本では、今までにない空想の世界を生み出すという活動となる。思い出系の絵本は、過去の経験を振り返るという活動が見られる。いずれも自己を明確に表す活動であり、その個性に合わせた援助の仕方が幼児の成長にとって大切であると考えられた。

キーワード：幼児の絵本づくり、図鑑的内容、物語的内容、思い出的内容、個性に合わせた援助

1. 始めに

1.1 絵本づくりの意味

著者らは、幼稚園の教員養成の一環として、幼児の絵本づくりを学生が援助するという活動を行っている。これは、絵本づくり援助の過程で学生と幼児の深い関わりが得られるのではないかと考えられるからである。絵本づくりでは、絵本を作りたいという要求が高い反面、複数のページをまとまりがあるように構成しなければならないので、幼児にはかなりの工夫と努力が必要となる。絵本づくりは、幼児にとって、楽しみながらも様々に考えなければならない活動になる。そのために援助者である学生と、絵本をどう作るかについて会話が盛んになり、深い関係が築きやすくなる。このような会話によって学

生は幼児を理解しやすくなり、適切な働きかけが容易になると思われる。

実際に昨年行った絵本づくりでは、学生は幼児と楽しく会話をし、信頼関係の築き方や意欲の引き出し方など幼児との関わりを深く考えるようになった(植草, 馬場, 安藤, 2013)。その結果、学生は、幼児との関わりが容易になったと答えるようになった(馬場, 植草, 安藤, 2013)。

絵本づくりは、学生ばかりでなく幼児にとっても意義のあるものである。昨年の絵本づくりを幼児と親の立場から評価した研究では、幼児が絵本づくりに強い興味を示し活動を楽しめたことを確認した。さらに親も真剣に取り組む姿が見られた(植草, 馬場, 安藤, 2013)。

このように幼児や親が絵本づくりに積極的に取り

[1] 著者連絡先：安藤 則夫

[2] 植草 一世

[3] 馬場 彩果

組んだのは、絵本づくりが、作りたいという高い動機づけをもたらす作業だからである。日頃から幼児も大人も読み聞かせや読書に欠かせないものとして、多くの絵本に接している。その多くは、絵本作家や出版社が丹精をこめて製作した芸術作品である。いわば立派なモデルが身近に存在するのである。このような絵本を作りたいと思うのは自然なことと思われる。

一方、絵本は、粘土や描画といった小単位の作品ではなく、関連しつながらある絵が何ページにもわたって展開される作品であり、それを作るためには全体を一つのまとまりとして構成する力が必要になる。また使える素材も、写真や絵、布、シール、文字など豊富である。その選択にも、幼児は努力が必要になる。

絵本づくりは、絵本を作りたいという幼児の要求が高い反面、苦労が多い作業と言える。その結果、幼児は絵本づくりに積極的に取り組むことになると考えられる。

このように考えると、自分自身が絵本づくりに積極的に打ち込むことで、幼児の自我が育つことが予想される。

1.2 絵本づくりと取り組みの仕方

幼児に絵本を作る機会を与えるのは、絵本づくりに対して幼児が積極的に関することで、幼児の心の成長にプラスに働くと考えるからである。著者らは、このように絵本づくりは、幼児の成長によい影響を及ぼすと考えるが、幼児の絵本づくりは始まったばかりであり、これに関する先行研究も多くはない。そのために子どもの自己の成長を助けるにしても、どのように援助したらよいかは明確にはなっていない。

そこで、今回は、幼児に家庭で絵本づくりをしてもらい、アンケート調査によって母親に絵本づくりの様子を書いてもらうことにした。夏休みに家庭で絵本づくりすることで、幼児は自分に合った作り方をすることができると思ったからである。また、幼児の様子をよく知っている母親の目を見た取り組みの様子を把握することで、幼児の作る姿や気持ち、心の成長が分るのではないかと考えた。

実際、何か活動することで、幼児がどのように変

わったかを把握することは困難なことと考えられる。例えば、物語づくりに関連する自伝的記憶の機能については、自己が何かを確認し、自己の成長に役立つ（佐藤，2008）と言われているが、上原（2008）の研究概観を見て分るように、語る能力や記憶能力の発達については研究されても、幼児の自己の成長にどのように役立つのかについての先行研究はない。家庭に入り、語ることの役割を研究した Miller（1994）は、自己の物語を聞いたり、物語を語ったりすることが、幼児の社会性発達に役立つと述べているが、社会性発達に役立つという点については推測の域を出ていない。

語りの影響を見るためには、語る事実を分析するだけでなく、語ったことで普段の生活に何か変化があるかを見ることが大切であろう。同様に絵本づくりで何が役立ったかを見るためには、幼児の変化を見ることが欠かせないと思われる。そのために、絵本が作られた後で、母親にアンケートをとり「何が得られたか」を質問することで、絵本づくりによって幼児の育ちがどのように影響を受けたかがわかるのではないかと考えた。

2. 目的

絵本づくりに対する幼児の取り組み方、そこから起こる心の成長を探り、その個性に基づく望ましい働きかけについて考察することが今回の研究の目的である。

子どもの成長を見るには教員による観察などいろいろな方法が考えられるが、今回は、身近な母親の目を見た子どもの成長を材料として、その特徴や個性を明確にし、どのような援助が望ましいかについて考察することにする。

3. 方法

3.1 対象児・研究の経過

○対象児

千葉市にある A 幼稚園の年長児 35 人
(男児 22 名, 女児 13 名)

○研究の経過

① 2013 年, 7 月 4 日 絵本の表紙づくり

保育士をめざす学生と一緒に表紙づくりを行う。

②夏休み、家庭での絵本づくり

一学期の最終日7月19日に、絵本づくりの説明を行い、表紙ができた絵本キットを家庭に持って帰ってもらう。絵本づくりは、夏休みの間に行なわれた。内容や作り方については、物語など自由に考えてもらうことにした。

絵本は、二学期（9月）が始まってから提出してもらった。

③絵本提出後、母親へのアンケート

絵本が作られた後で母親に絵本づくりでの幼児の様子や絵本を作って得られたことや幼児について再認識したことを、アンケート調査した。

3.2 絵本の素材

絵本づくりの素材として、手づくり絵本館の絵本キット（有限会社ログハウス、B5横サイズ、14ページ）を使用した。本物の絵本らしい素材である。

3.3 母親へのアンケートの内容

答えを選択する質問と記述式で答える質問を行った。答えを選択する質問は、「1.そう思う」「2.ややそう思う」「4.あまりそう思わない」「5.そう思わない」の4件から答えを選ぶものである。質問項目は以下の通りである。

1. 絵本の物語が自分の経験に基づいている（以後、「自分の経験」と略す）。

2. 自分の経験から実際以上に頑張ったり活躍したように書かれている（以後、「活躍の仕方」と略す）。

3. 自分の経験から、学んだことが書かれている（例えば、生きものを大切にしなければいけないなど、以後、「学んだこと」と略す）。

4. 自分の経験から、こうなればよかったという受け身的な希望が書かれている（例えば、お母さんに助けてほしかったなど、以後、「受動的希望」と略す）。

5. 自分の経験や現状をありのまま、描いている（家族や好きな物紹介、以後、「リアリズム」と略す）。

6. 自分が経験した感情を表現している（気持ちを表現してスッキリする、以後、「気持ち表現」と略す）。

7. 知っていること、知りたいことをまとめている（以後、「知識のまとめ」と略す）。

8. 全くの空想物語である（以後、「空想」と略す）。

記述式の質問は2つあり、次の通りである。

「9.絵本作りの際のお子さんの様子をお書きください」

「10.絵本作りを通じてお子さんが得たことやおうちの方が再認識した点がありましたらお書きください」

以上のように、選択式質問では幼児が自分の経験を絵本にどのように表現していたかを問う質問が中心であり、記述式質問では絵本を作るにあたっての本人の取り組み方や絵本を作ったことで本人が得られたことや母親が新たに発見した幼児の姿を尋ねた。

4. 結果

4.1 絵本の内容

出来上がった絵本は、34冊であった。母親へのアンケートの回収は、33枚であった。

絵本の内容は様々であったが、おおむね、虫や乗り物、怪獣といった興味のあるものを絵や写真で並べて表示するという「図鑑系」、経験や空想にもとづいて物語を作った「物語系」、自分や家族の思い出やしたことの経験を絵や写真、文でまとめた「思い出系」に分けられた。

「図鑑系」は、12作品。「物語系」は、13作品。「思い出系」の絵本は、9作品であった（表1）。

表1 絵本の内容別分類

単位：人

図鑑系	物語系	思い出系
12 (12) 男10 / 女2	13 (12) 男5 / 女8	9 (9) 男6 / 女3

註：() 内の数字はアンケート回収数

「物語系」では、自分自身が登場する物語は3作品あった。これらは、自分の名前が書かれていたもので、本人であることが分った。他に1つの物語には「女の子」が登場する。内容から判断すると、本人であると思われる。残りの9作品では、うさぎなどの動物が主人公のものが4つ、自分の好きな植物が主人公となっているのが1つ、モノが主人公であるのが2つ、子供または人、仮想の生物が登場するのがそれぞれ1つずつあった(表2)。

表2 物語の登場人物

単位：冊

自分	女の子	動物	植物	物	人	仮想
3	1	4	1	2	1	1

中間的な内容や複数の内容が混在する作品もあったが中間型・混在型とした。ただし、3つのカテゴリへの分類にあたっては、中間型・混在型も純粋型も含め、主な内容に基づいて行なわれた。「図鑑系」に入れた中間型・混在型としては、様々な車を紹介しながら、どれも同じ出来事(事故)があったという文が付け加えてある。「物語系」に入れた中間型・混在型としては、始めは物語だったのが思い出アルバムへと変化した内容である。「思い出系」に入れた中間型・混在型としては、始めは、車図鑑であったのが思い出の絵や写真に変化したもの、昆虫の観察経験をまとめたもの、様々な電車を見学してきた写真集があった。

絵本を作った幼児は、男児21人、女児13人であった。内容別に男女の比率を見ると、違いが現れた。「図鑑系」では、男児10人に対して、女児2人と圧倒的に男児が多かった。「物語系」について見てみると、男児5人、女児8人で、全体の比率から見ても、女児の割合が多いということが分る。「思い出系」は、男児6人、女児3人で、全体の比率(22:13)を反映した配分となった。

4.2 選択式アンケートの結果

アンケートの選択肢の部分における全体の集計は次の通りである。なお、思い出系のアンケートの④に回答していない人が1人いたために合計が合わない部分がある(表3)。

表3 選択式質問の全体的集計

単位：人

項目 \ 評価	1	2	4	5
①自分の経験	11	9	3	10
②活動の仕方	2	9	12	10
③学んだこと	5	9	8	11
④受動的希望	0	2	11	19
⑤リアリズム	13	10	5	5
⑥気持ち表現	8	10	4	11
⑦知識のまとめ	14	9	5	5
⑧空想	4	9	5	15

全体的に見ると、自分の経験に基づいているかどうかや、気持ちが表現されているかどうかは、どちらとも言えない結果であった。経験以上に頑張ったように描いている幼児は少なく、経験から学んだことを書いている幼児も少なかった。傾向が明確なのは、受動的希望が書かれていない、知識をまとめている、空想ではないという項目であった。事実のまま描いているかどうかに関しては、描いているとする幼児が多いと言える。

表4 図鑑系のアンケートの集計

単位：人

項目 \ 評価	1	2	4	5
①自分の経験	1	3	1	7
②活動の仕方	0	2	4	6
③学んだこと	2	3	2	5
④受動的希望	0	1	2	9
⑤リアリズム	5	4	0	3
⑥気持ち表現	1	2	0	9
⑦知識のまとめ	9	2	0	1
⑧空想	2	2	1	7

図鑑系の絵本づくりを選択式質問の結果から見ると、自分の経験には基づかず、自分を絵本の中に表現することはない傾向にある。従って自分の経験に脚色を加えず、経験した通りに描くことが多く、空想も少ない。知識をまとめる形の絵本づくりとなっている(表4)。

表5 物語系アンケートの集計

単位：人

項目 \ 評価	1	2	4	5
①自分の経験	2	5	2	3
②活動の仕方	1	6	3	2
③学んだこと	3	4	2	3
④受動的希望	0	1	7	4
⑤リアリズム	1	4	5	2
⑥気持ち表現	4	3	3	2
⑦知識のまとめ	2	6	1	3
⑧空想	2	6	4	0

物語系では、自分の経験に基づいていることが多く、自分が実際以上に頑張ったように表現している傾向が見られた。経験から学ぶことは表現されているが、受け身的な希望は表現されていない。自分の経験をありのままに描くことはどちらかと言えば少なく、多少空想が多い。知識をまとめるという面は多少あり、気持ちを表現することが多い。経験に基づきながら空想し、気持ちを表現しているとまとめられる(表5)。

表6 思い出系のアンケートの集計

単位：人

項目 \ 評価	1	2	4	5
①自分の経験	8	1	0	0
②活動の仕方	1	1	5	2
③学んだこと	0	2	4	3
④受動的希望	0	0	2	6
⑤リアリズム	7	2	0	0
⑥気持ち表現	3	5	1	0
⑦知識のまとめ	3	1	4	1
⑧空想	0	1	0	8

思い出系は、自分の経験に基づく作品であり、ありのままに表現し、経験以上によく見せようとすることはあまりなかった。学んだことやこうなってほしいという希望が書かれることも少なかった。気持ちの表現は多く見られた。自分の知識をまとめたという幼児もいたが、自分の経験の整理を知識のまと

めと解釈したせいではないかと思われる。空想を加えた幼児は、いなかった(表6)。

4.3 作製時の様子に関するアンケート結果

絵本の内容別に見たアンケートの結果は次の通りである。なお、原文を簡潔な形に改変した。

①図鑑系絵本づくりの時の子どもの様子。

始めから図鑑と決めていて、すぐに完成した。／魚図鑑を書くとき自分で決める。絵は本人、説明は兄が書く。楽しそうに作業を進めた。／図鑑を見て書く。分類分けも一人で考える。／母と一緒にすばやく作りあげた。できたとき達成感を感じた。／書くことが苦手で始めは書きたがらない。図鑑をまねして書くことから始めると楽しくやり始めた。／母親の促しによって作業した。書きたいことは自分の中で決まっていた。／始め、物語を書こうとして筋が決まらない。レシピノートにすると決めてから楽しく取り掛かった。／自分の知っていることを人に伝えたくて考えていた。／自分の好きな絵を書いていた。／一人でもくもくと書いていた。／自分の好きなように自由に描いた。／好きなヒーロー図鑑をつくりたいと絵の横に説明を付けくわえていた。

②物語系の絵本づくりの時の幼児の様子

楽しそうにやる。自宅ではモチベーションが高まらない。／最初は意欲あり。途中「わからない」とぐずる。そこで兄に手伝ってもらう。／物語がなかなか思いつかず苦勞し、絵を先に書いたので、文はちぐはぐとなった。頑張っている。／楽しそうに、いつの間にか仕上げていた。／物語は、自分で考え、しっかり考えながら書いていた。／親の手伝いを求めず、一日で一気に書き上げる。／好きなキャラクターで好きな花の話を作った。絵を書くのが好きで楽しく絵本をつくった。／自主的に書く。一気にストーリーを書き上げ満足そうだった。／幼稚園から持って帰ってきて、すぐに一気に書き上げた。／楽しかった。／絵本の丸写しを始めたので、母親が手を出し、母親の作品になってしまった。／絵本の内容がなかなか決まらず、母親があせる。しかし、話し始めると一気に仕上げ、集中して仕上げていた。

③思い出系での絵本作りの時の様子

写真をいっぱい楽しく貼っていた。／母親が写真

の周りに絵や文字を書かせると、うまく書けないと言うが、見本を見せて誘導し書かせる。／家族の思い出を楽しそうに書く。／のりをつける作業を楽しんでいた。／親子でコミュニケーションをしながら、表現方法や字などを学ぶ。そのプロセスを楽しむ。／絵描き、のりづけが好きで、一生懸命取り組む。／物語を考えるよりは、文字を書くことを楽しむ。／好きな電車を見に行く。写真はりも率先してやった。文字は見ながら書いた。／大好きなことを載せているので、シール貼りを手伝う。言葉は一緒に工夫した。

まとめると、図鑑系では作り始めると、楽しく黙々と作り上げる幼児が多かった。絵本系では苦勞している幼児と一気に書き上げる幼児とに分かれた。思い出系では、楽しく母親と共感しながら作業することが多かった。

4.4 子どもが得たものに関するアンケート結果

最後の記述式質問では、「子どもが得たもの」と「おうちの方が再認識した点」の2点について聞いているが、結果の集計は別々に行なった。まず「子どもが得たもの」の記述をまとめた。

①図鑑系の記述

大人が何も言わなくても、自分で考えて好きなものを書いて作れるようになった。／好きな魚の種類と名前、形を覚えられた。／書くことは苦手なのに図鑑をまねて次々と書けた。／「こうしたい」という主体性が出てきた。／自分の頭の中で考えるようになった。／本や外でいろいろ調べて、季節の情報を得られた。／書くことに苦勞していたが、いい体験になった。

②物語系の記述

自宅では、作る楽しみより、宿題になってしまった。／最初から最後まで一人で完成させることができた。頑張った。／絵本にも、愛情深いところが表されている。／なかなかできないことなのでよかったと思う。／できた絵本をととても大切にしている。作る喜びややり遂げた自信を得た。／オリジナルの絵本は、親子のすてきな宝物になる。／絵本を書きあげた達成感があったと思う。／仮想の生きものなど、具体的に説明することができた。／「自分で作ったよ」という達成感を味わった。

③思い出系の記述

サッサッとにぎやかに仕上げていた。／思い出を振り返り、母子で楽しさを共感し合った。難しかったが最後までやりとげ、満足気だった。／仕上がった時、満足感があった。／少し字を書くとすぐ疲れたという事が多かった（一生懸命とりくんでいた）。／難しいと言いながらも、頑張らせるとなんとかやっていた。

まとめると、図鑑系では書く力やまとめる力があったという意見が多かった。物語系では、普段できないことができたという達成感や自信が得られたという意見が多かった。思い出系では、仕上がりの達成感や人との楽しさの共有があげられていた。

4.5 親が再認識したものに関するアンケート結果

「おうちの方が再認識した点」の記述は次の通り。

①図鑑系の記述

改めて電車が好きだと再認識した。／絵本づくりの様子から、とても成長を感じることができた。／分類分けした、カタカナ・ひらがなも書けた、自分なりに調べて絵を書いたことをすごいと感じた。／書くことが苦手なのに、積極的に書いたので驚いた。／「このテーマを書きたい」が決まっていた驚いた。／途中で投げ出すかと思ったが、集中力に感心した。／自分の絵本を意識して、絵も字も自分で書こうという意欲があった。／家族を大切にしている娘を再認識した。／物語を作るのは困難。普段から、何かを考えたり紙に向かったりする機会を増やしたい。

②物語系の記述

自ら考え、文章を構成するのは困難。日頃から、文字の練習、お絵かきをさせておけばよかった。／ストーリーがなかなか決まらなかった。日頃から、絵本を読む機会を多く持たないといけないと思った。／今回自分の力でできたのは、日々の体験や出会った物語に創造力をふくらませる力をもらったからと思う。／子供の想像力は凄いなと思った。思っていることを絵や文字で表現できることは凄く良い。／家で読み聞かせしているが、絵本が大好きだったと感心した。／日頃読み聞かせしていないのに、絵本にきちんと絵とことばの両方を書いていたのは驚いた。／子どもよりも自分優先であることに

気づかされた。子どもの気持ちを長い目で見れるようにしたい。／「たまご」がそこまで好きかと感心した。

③ 思い出系の記述

姉妹が個性的で、育児は楽しいと改めて思った。／大きくなったら、本物の車を運転したいのだと思った。／思ったより色々な事がわかることを認識した。／絵本として面白い一頁でも、先生方に見せるのは恥ずかしいという部分が出て来た。／子どもの視点ならではの面白い発想をするなどと思った。／貼ったり書いたりする時に意外と大胆だと、新たな発見をした。

まとめると、図鑑系では、「意外にできる」という驚きが見られた。物語系では、日頃の文字、絵書きの練習不足を感じた反面、隠された才能に驚くという面が見られた。思い出系では、多面的な気づきが見られた。

5. 考察

5.1 絵本づくりの困難さ

絵本づくりは幼児にとっては困難ではないかという予想をしたが、幼児によって困難さを感じる程度は違っていた。予想通りに一人で一生懸命仕上げる幼児がいたが、一人で一気に楽しく仕上げる幼児もいた。物語の筋が思いつかなくて苦しんだ幼児や文字を書くのが難しいという幼児もいて、そのような幼児は母親に励まされたりヒントをもらったり、母親と一緒にやったり、兄弟に手伝ってもらったりして仕上げていた。嫌々ながら始めても、やる事が定まったり、やり方が分かると、楽しく取り組めるようになったという幼児がいた。

ある程度困難であったためと思われるが、絵本を仕上げ達成感を感じる幼児が多かった。このような達成感、自信にもつながり、幼児の心の成長にプラスになると思われる。

5.2 3種類の絵本への取り組み方

幼児がつくる絵本は、その内容から見て、3つの領域に分けられた。

一つは、自分の好きな対象を並べて示す図鑑的な絵本である。楽しく書いたという記述が多いが、も

とも好きなことを書くためと思われる。

もう一つは、空想して物語をつくる物語絵本である。物語が好きですらすらと仕上げる幼児もいれば、苦勞してストーリーを考えて書く幼児もいた。

最後の一つは、家族や友達との思い出の出来事を写真や絵でアルバム風に並べた作品群である。楽しい思い出を振り返りながら作った幼児が多いようであるが、字を書くことで苦勞する幼児もいた。

この3つの領域は、幼児の生活領域を反映していると思われた。図鑑系は、車や昆虫といったどちらかと言えば、家庭や友達といった日常の生活から離れた存在への興味を示している。活動としては、知識欲や知的好奇心を反映したものである。物語系絵本は、経験に基づきながらも実体験から離れた空想の世界であり、活動としては想像や創造性が発揮されるものである。思い出系は、家族や友達といった身近な日常生活の世界であり、活動としては思い出したり家族の人と共感したりするものである。

5.3 図鑑系の絵本づくり

図鑑系の絵本づくりをアンケートの結果(表4)から見ると、空想を加えず自分の経験をありのまま描くことが多く、知識をまとめる形のものであった。

また、絵本づくりの様子をアンケートから見ると、始め書きしぶった幼児もいたが、始めから自分で何を書くか決めて、楽しく、またはもくもくと仕上げる幼児が多かった。自分の好きなことであり、さらに本物の絵本のようになっているので、やる気が出たのではないと思われる。

子どもが得たもので見ると、書くことが苦手であったが書けるようになったなど、書く力がついたという指摘、自分でまとめる力、自分で考える力、こうしたという主体性が得られたという指摘もあった。また調べることで知識が得られたという指摘もあった、構成力や表現力、調査力、知識が身に着いたと母親は評価している。

母親が子どもについて再認識したことで見ると、「意外とできる」という驚きが多かった。文字が書けた、苦手なのに書けた、自分なりに調べた、意欲・集中力があつたが驚きの内容である。他に、愛情の深さが分かったや書く力の必要性を感じたとい

うものがあつた。好きなことをすることで、普段発揮されないような力が見られたということであろう。

図鑑系では、作品を作り上げるためのやる気や努力が見られたと考えてよいであろう。

以上のことから、図鑑系の絵本づくりでは、興味があつて自分で進めていくところがあるので、幼児が興味を持つことに対して、大人も興味を示すことが大切であろう。援助するにしても、調べ方や説明の仕方などの助言をしてあげるとよいと思われる。今回も、書き方を教えたり、関係する図鑑を示したりする援助が行なわれた。

5.4 物語系の絵本づくり

物語系では、自分の経験に基づいていることが多く、自分が実際以上に頑張ったように表現している傾向が見られた。経験に基づきながら空想し、気持ちを表現しているとまとめられる。

作製時の様子は、苦勞している幼児と一気に書き上げる幼児に分かれた。物語を考えることが難しい子と物語を考えるのが得意で自分で仕上げる幼児がいたということである。田島(1998)が指摘するように、「創造的課題」は慣れないうちは生み出すのに苦勞するのであろう。

子どもが得たものを見てみると、普段できないことができたという達成感が見られる。やり遂げたという自信も見られた。物語を創造する難しさがある反面、「自分のもの」ができたという喜びもあつたと思われる。

親が再認識した点について見てみると、日頃から、文字の練習や絵書き、絵本読みが不足していたという反省があつた。逆に、その創造力や表現力、子どもの好みを再認識させられたという記述が見られた。隠された才能に驚くという感じであつた。

創造性を必要とする物語づくりは、日頃やっていないだけに、得意不得意が分かれたと思われる。物語づくりは物語が好きだからと言っても、昆虫や車への興味のように、知識欲があればすぐ本を見つめるように簡単に実行に移せない活動かもしれない。また、絵本と言えは物語という連想に縛られて、得意ではないが物語を作ろうとした幼児もいたであろうし、物語は好きでも作ることはしたことが

なかつたという場合もあるであろう。

産みの苦しみを味わう幼児には、寺井(2013)のように、物語づくりのパターンを示すというやり方も一つの方法であろう。一人の母親が幼児に勧めたように、とりあえず思いついた絵を書かせて、そこからさらにアイデアを出させるというのも幼児の思いつきから出発するという利点がある。また、物語も自分の経験に基づくものが多い(寺井, 2013)ので、様々な思い出を思い出すこともよい方法と考えられる。基本的には、大人との対話を通じてイメージを膨らませる(衛藤と野中, 2013)ということであろう。

5.5 思い出系の絵本づくり

思い出系は、自分の経験に基づく作品であり、経験を整理し、ありのままに表現したものであつた。

作業時の様子を見ると、楽しく糊付けしたり説明を書いたりしていた。作業自体は簡単でしかも楽しい経験を思い出しながらやるので楽しい作業になつたのであろう。また、思い出は他の人と共有できるので、母親と会話しながら行う幼児もいた。

子どもが得たものとしては、仕上がった時の満足感や母子の思い出と共感があつた。家族のつながりの中で自分を認識することができたのではないかと思われる。

親が再認識したことを見てみると、比較的バラティに富んでいた。将来の職業、製作の大胆さ、面白いアイデア、見られることに対する恥ずかしさなどであつた。

思い出系の絵本づくりでは、自分の思い出にまつわる感情を再経験し、人と共感することが大切と思われる。楽しく思い出することで、作業の方もはかどるだろうし、自分の感動をどう伝えたらよいかという工夫にもつながるだろう。

自分の経験してきた思い出が、自分がどんな人間であるかを確認する作業を促し、自己形成の基になる(Nelson, 2004)ので、自分の思い出を肯定的に整理することが大切である。

思い出系では、幼児の思い出への大人の興味や共感が重要と思われる。

5.6 絵本づくりでの個性の把握と援助の仕方

全体的に見ると、幼児は絵本づくりをすることで、達成感が得られ、隠されていた才能を発揮できるようになることが分かった。また、絵本づくりで幼児は様々な個性的な取り組み方を示し、図鑑系、物語系、思い出系の絵本が作られた。図鑑系絵本では、知的好奇心や構成力が発揮される。大人は、幼児と興味を共有し、幼児の興味を発展させる働きかけをすると良いだろう。物語系絵本では、空想や創造力が発揮される。大人は、幼児の小さなアイデアをも評価する働きかけをすると良いだろう。思い出系絵本では、楽しい体験が再現される。大人は、その楽しさに共感することが大切であろう。

槇(2004)も、幼児の「表現スタイル」の違いを配慮した保育実践が望ましいと主張している。ただし、本研究とは異なるタイプ分けを行なっている。幼児の個性をどう捕らえ、どう分類していったらよいかについて、さらに検討を重ねていく必要があると思われる。

倫理的配慮：協力をしていただいたA幼稚園の母親からは、絵本やアンケートを研究目的で使用する許可を得ています。また、個人的情報が記載されないように配慮しました。

6. 謝辞

研究に協力していただいた、A幼稚園の年長組のお母さん方、職員の方に感謝いたします。

7. 文献

- 1) 植草一世, 馬場彩果, 安藤則夫. 教師(保育者)を目指す学生が手作り絵本に取り組むことの意義-子どもとの関係作りの意識調査. 日本保育学会発表論文集. 2013; 66: 932
- 2) 馬場彩果, 植草一世, 安藤則夫. 教師(保育者)を目指す学生が手作り絵本に取り組むことの意義-保育者になるにあたっての子ども理解の意識-. 日本保育学会発表論文集. 2013; 66: 933
- 3) 植草一世, 馬場彩果, 安藤則夫. 子どもが絵本作りで発見すること. 植草学園大学紀要. 2013; 5: 7-16.
- 4) 佐藤浩一. 自伝的記憶の機能. 佐藤浩一, 越智啓太, 下島裕美 自伝的記憶の心理学. 北大路書房. 2008: 60-89.
- 5) 上原泉. 自伝的記憶の発達と縦断的研究. 佐藤浩一・越智啓太, 下島裕美 自伝的記憶の心理学. 北大路書房. 2008: 47-58
- 6) Miller, P. J. Narrative practices: Their role in socialization and self-construction. In U. Neisser & R. Fivush, The remembering self. Construction and accuracy in the self-narrative. Cambridge UniPri, 1994; 158-179.
- 7) 田島啓子. 作話に及ぼす幼児と援助者の社会相互作用の影響について 日本女子体育大学紀要. 1998; 28: 69-78
- 8) 寺井知香. 幼児の創作絵本への取り組みについて-保育実践より-. 日本保育学会発表論文集. 2013; 66: 267.
- 9) 衛藤大輔, 野中千春. 子どもの表現が深まる時-絵本製作を通して-. 日本保育学会発表論文集. 2013; 66: 737.
- 10) Nelson, K. and Fivush, R. The emergence of autobiographical memory: A social cultural developmental theory. Psychological Review. 2004; 111 (2): 486-511.
- 11) 槇英子. 幼児の「表現スタイル」に配慮した保育実践. 保育学研究. 2004; 42 (2): 35-44.

Activity Styles of Young Children in Picture Book Making —Consideration from the Mothers' Questionnaire—

Norio ANDO^[1] Faculty of Child Development and Education, Uekusa Gakuen University
Kazuyo UEKUSA^[2] Faculty of Child Development and Education, Uekusa Gakuen University
Ayaka BABA^[3] Faculty of Child Development and Education, Uekusa Gakuen University

The purpose of this research is to make clear the role of caregivers who help young children make their picture books. Although young children are attracted by making picture books, it involves the difficulty of integrating the contents on several pages. The process needs efforts and deep self-involvement of young children. They may choose their most favorite themes and work hard for making picture books in which their human natures become apparent. In this research, children of around 5 years old made picture books at home during the summer holidays. After the completion, their mothers responded to our questions about the activity and feeling of the children. The picture books are classified into three groups based on the contents. The first group is categorized as 'illustrated book'. The children who made this kind of picture books sought information about their favorite things. The second group is categorized as 'story book'. The children who made this kind of picture books imagined their favorite stories. The third group is categorized as 'album'. The children who made this kind of picture books enjoyed the past events. Although these groups are different in contents, every group shows some kind of self-involvement. We consider the support methods for the children which are suitable to each individual activity style.

Keywords: picture book making of young children, illustrated book, story book, album, individualized support methods.

[1] Norio ANDO

[2] Kazuyo UEKUSA

[3] Ayaka BABA